

資源循環研究部会(部会長 凌 祥之九州大学大学院農学研究院教授)では、農村地域でのバイオマス利活用システムの構築には関係者との幅広い連携が必要なことから、他分野の研究者や技術の普及を担う自治体の担当者との交流を積極的に行うこととしています。本年度も大会講演会での企画セッションや現地見学会の場を利用して、関係者との情報交換を行いましたので、ご報告いたします。

1. 企画セッション

本年度の企画セッションは、9月5日に「持続可能な社会の構築に向けての資源循環の施策、事例及び技術」をテーマに開催し、地方自治体、民間企業、国立研究開発法人、大学から4名の方にご講演いただきました(写真-1)。発表者および講演タイトルは下記のとおりです。農業農村工学分野では聞けない話題に会場から多くの質問があり、熱心な議論が行われました。

1. 「東京都の資源循環に係る取組」

塚田 泰久(東京都環境局)

2. 「課題解決型コ・デザインと農業の7次産業化～持続社会システムづくりの実践事例の紹介～」

島田 敏(島田設備株式会社)

3. 「アミノ酸バランス飼料による養豚の環境負荷低減」

荻野 暁史(農研機構畜産部門)

4. 「乾式メタン発酵による循環型豚ふん尿処理に関する研究」

利谷 翔平(東京農工大学工学府)

2. 現地見学会

現地見学会は、10名が参加し、9月6日に東京農工大学工学部化学物理工学科 寺田・利谷研究室を訪問しました。寺田・利谷研究室は、環境・ケミカル・バイオと化学工学を融合した多角的なアプローチにより、環境・エネルギー問題に対して最善の解決策となる技術開発に取り組まれています。今回は、研究室の研究テーマの一つである豚ふん尿と稲わらを原料とする乾式メタン発酵関連の研究施設を、孟 令宇特任助教にご案内いただきました(写真-2)。その後の意見交換会では、「福島県大熊町のメタン発酵構想ーメタン発酵による原発事故被災地の保全ー」(農村工学部門山岡 賢)、「農業集落排水施設における小規模メタン発酵システムの検討」(農村工学部門中村真人)について話題提供を行いました。参加者の大熊町担当者が原子力発電所被災農地復興の現状を、地域環境資源センター担当者が小規模メタン発酵の実証プラントの建設状況を補足するなど、情報交換し、活発な議論が行われました。

今回の見学会は、メタン発酵を計画している自治体の担当者にとっては、実際に技術に触れ、専門家と議論でき、逆に、研究者にとっても普及現場の担当者と交流できる良い機会になったと思います。

資源循環研究部会は、日ごろからメーリングリストを活用して部会員間の情報交換を行っており、今後も引き続き、行政(国、地方)、研究、民間企業等が交流する機会を作っていきたいと考えています。

(部会事務局:中村真人,山岡 賢,折立文子)



写真-1 企画セッションの様子（利谷准教授の発表）



写真-2 研究室見学（説明は孟特任助教）